

## 第二矢 恋ひ恋ひて

——久安六年（一一五〇）十二月九日、宇治・小松殿

1

とうに冬日は落ち、平安京南郊の宇治はとつぷりと夜の闇に沈んでいた。

撰関家ご自慢の小松殿西廊には、藿香の強い薫物が香っている。

「撰政を辞める代わりに関白とは、いかなる了見じゃ?!」

悪左府頼長のひとときわ甲高い声が、家成の耳朶を刺す。

家成はことさら神妙な顔を作ってみせた。

「ご高承の通り、忠通卿は一筋縄ではいかぬ曲者におわしますゆえ……」

昨日、頼長の兄で、失脚するはずの藤原忠通が、撰政から関白になった。

「おのれ……」

頼長の顔面は蒼白で、こめかみに立つ青筋が高燈台の明かりでも見えた。

「面目次第もございませぬ」

家成は申し訳なさそうに両手を突き、上目遣いに相手を見た。

頼長の神童ぶりは有名で、長じてからは「日本一の大学生」とまで称えられた。わずか十七

歳で正二位内大臣に上り詰めた撰関家きつての貴公子は、挫折をほとんど知らなかった。

家成は腹の中でほくそ笑む。

摂関家は、親兄弟に分かれて激しく対立していた。

かの藤原道長みちながから数えて五代目の忠実ただじまねは当初、長男忠通うじのちようちやを氏長者として出世させた。後継ぎに恵まれなかった忠通は、二十三歳年下の異母弟頼長に後を譲る心づもりだったが、七年前、四十七歳にして待望の男児を授かって以来、仲睦まじかった兄弟の間に亀裂が入り始めた。出家し円理えんりと名を改めていた忠実は、頼長に味方した。孫よりも息子くみに与するのは、ままたある話だ。

扇子を握り込む頼長の上品な手が小刻みに震えていた。それでも三十路を過ぎて、多少は自分を抑えられるようになったらしい。

(世には、思い通りにならぬこともあるんじゃぞ)

この九月、円理を後ろ盾に氏長者となった頼長は、兄に「摂政」の返上を要求した。忠通は相手にしなかったが、円理に迫られて一計を案じた。言われた通り摂政を辞す代わりに「関白」になると、鳥羽院へ申し入れてきたのである。

「今年初め、帝は急ぎ元服遊ばされ、すでに摂関家の姫君がお二人も入内じゅだいなさっておわしますれば、もはや摂政ではなく関白じゃろうと……」

兄弟の政争は当然、禁中にまで波及していた。病弱であられる当今とうじんの次の天皇の外戚となった者が、勝利する。

今年一月、頼長が数え十二の帝に十一歳の養女多子たしを入内させると、忠通も対抗して、ただちに二十歳の養女呈子ていしを入内させた。天皇が二人の正妻を持つ〈二帝二后〉である。円理は激怒して忠通を義絶したが、今回の関白就任は、頼長が帝の元服を早めたのを逆手に取ったわけだ。

「それが、院のご叡慮えいりょだと申すのか？」

家成は内心で嗤わらった。

やっと出てきた言葉が、無意味な念押しの間いとは。頼長は学識と気位の高さゆえに、してやられたという悔しさが人一倍強い。今は滾たぎる感情を抑えるだけで、精一杯らしい。

「摂関家の融和を願われる院のご心中、どうかお察しくださいませ」

忠通からの振ねじ込みに対し、家成は渋面じゅうめんを作りながらやりとりを重ねたものの、内心では飛びつき、摂関家を弱らせる好機だと院を口説いた。

思惑通り、摂関家の内紛は最高潮に達しようとしていた。燃え盛る対立の炎に、鶴ぬえの一件を絡めてゆくのだ。

「負けるわけには、いかぬ……」

頼長が唇を噛むと、赤が色を失った。

すつかり政争に勝ったつもりで、父から譲り受けた宇治の別荘しゅじょうで衆道しゅどうに励んでいては、百戦錬磨の兄に一本取られるのは当たり前だ。

家成は沈黙して、瞋いかりに燃える頼長の吊り目を見た。

余計なことと言わぬに限る。中途半端に頭の切れる人間は、放っておけば、妄想を勝手に膨らませてゆくものだ。

(悪左府よ、憤れ。もっと悔しがれ)

摂関家は長らく朝廷を蔑ないがしろにしてきた。いったんは没落したものの、円理と忠通の代に再び力を持ち過ぎた。そこで、頼長を取り立て、忠通に対抗させて力の均衡を図るのが、鳥羽院側の一

貫した方針だった。ところが、今度はその頼長が凶に乗り、息のかかった者たちを要職につけ、政を壟断ろうだんし始めた。この八月には、義理の叔父三条実行を太政大臣、義父の徳大寺実能を内大臣とした。右大臣の源雅定が中立の立場で危うい均衡を保っている。

家成の目論見は単純だ。摂関家の内紛を煽り、長引かせ、力を弱めてゆく。そしていずれは院近臣たる家成が一上いちのかみとなるのだ。

「おとなしく書に勤いそしんでおればよいものを。何としてくれようか……」

忠通は能書家として著名だが、頼長がその政才を侮っているとすれば、哀れというほかない。

頼長は学問こそ拔群にできても、前に突き進むだけで、方向を変えたり一時退くしたたかさを持ち合わせていなかった。だが、背後にいる円理は老獪ろうかいな策士だ。当然ながら次の手を打つてこよう。摂関家が喰らい合えばいい。実際、鳥羽院側は、円理が忠通から取り戻した家地・莊園を献上させ、漁夫の利を得ていた。

政争では、自分が成功するより、相手を失敗させるほうがしばしば容易だ。

「ところで左府様。平安京、なかんずく禁裏は、例の化鳥けちように久しく悩まされております」

鶴は十一月の十五夜にも現れて、人をひとり喰った。

「何の呪いか祟りか、泰親やすちかに調べさせておる」

出現から半年、被害の残酷さも相まって、いまや鶴が都人の口の端はに上らぬ日はない。

「まことに早良親王の仕業でございませうか。民からは政に対する怨嗟えんさの声が上がり始めておる様子。由々しき話にございまする」

世を頻繁に襲う天変地異は、長らく怨霊のせいだとされてきた。だが、呪いや祟り、穢けがれによ

雁字搦めがんにがらで、息の詰まりそうな暮らしに、都人はもう嫌気が差している。

「磨まろに責めがあるとでも申すのか？」

「滅相もございませぬ。されど、愚かな民はよく嘘に騙され、踊らされ、ことさら膨らませて騒ぎ立てるもの」

この数カ月、家成は元興寺がこぜに命じて、鶴の恐怖をことさら喧伝し、悪左府はなぜ野放しにしておくのかと、都人の不満を煽らせた。人間はおどろおどろしい話を好むから、無惨な骸について詳しく伝えるだけで、噂は想像でたっぷり尾ひれを着けながら勝手に広がってゆく。根も葉もない嘘でも、真実を少しばかり混ぜながらもつともらしく繰り返せば、ろくに確かめもせず信じる馬鹿が出た。一度火をつけてしまえば、煙は何本でも立つ。そもそも「悪左府」のあだ名を考えて流行らせた張本人も、家成だった。

「先の十五夜には、例の不気味な黒雲が清涼殿せいりょうでんの上にまで及んだとか。帝と院のご心痛、いかにばかりか、と……」

かくも騒ぎが大きくなり、都人の不安が高まれば、一上として政の頂点に立つ頼長に、事態収拾の責めがある。

「院に申し上げよ。この頼長が鶴を退治して見せるとな」

頼長は苛立ちを隠さず、荒々しく立ち上がった。

「安堵いたしました。鳥羽に参り、しかとお伝えいたしまする」

足をすくってやる。この機に、頼長と泰親との間をも裂けるなら、さらに好都合だ。

両手を突く家成の頭上へ、忌々しまごましげな声が落ちてきた。

「中納言、磨には見えておるぞ。そちこそが忠通めと手を結んで、畏れ多くも院を誑かして  
おるのであるうが」

身を起こすと、頼長が檜扇の先を家成に突き付けていた。さすがに馬鹿ではない。

「関白殿下は煮ても焼いても食えぬお方。磨のごとき、掌で踊らされぬよう立ち回るだけで、精一杯にございまする」

「今に見ておれ。そちを先に踏み潰してやるわ！」

院、忠通と頼長の三つ巴の政争は、後宮内の不和とも結びついている。

かねて鳥羽院の後宮では、先帝（崇徳上皇）の母である待賢門院派と、帝（近衛天皇）の母である美福門院派の二派が激しく反目してきた。美福門院の従兄にあたる家成は、もちろん後者の派閥だ。他方、待賢門院の姪を嫡妻とした頼長は、当然その一派に与っていた。今年行われた相次ぐ入内で、両派の対立はいよいよ抜き差しならぬものとなった。

院は両派の均衡を望んでおり、一方に肩入れしにくい立場だ。院の腹心とはいえ、家成は美福門院と一蓮托生の身であり、院とも利害が完全に一致していなかった。

「成り上がり者の女と諸大夫ふぜいが！」

頼長は美福門院と家成に対する侮蔑を隠そうともしない。院近臣たちを蛇蝎のごとく憎悪し、馬鹿にし、面罵した。人を人とも思わぬ傲岸不遜と癩癩のゆえに、多くの敵を作ってきた。

「磨はあくまで院のお指図の下に——」

「黙れ、二枚舌め！ 磨はこの世で一番そちが嫌いじゃ」

激昂した頼長が檜扇を真横へ払った。

はたかれた家成の立烏帽子が板間へ落ちて、転がった。貴族にとって最大の侮辱だが、家成には痛くも痒くもない。

「鶴退治で、磨が一上じやと、天下にあまねく知らしめてやるわ」

捨て台詞を残して頼長が足音荒く去った後、家成は立烏帽子を拾い上げ、形を確かめてから、頭に載せた。

小松殿を出た家成は、牛車ぎっしやにゆったりと揺られていた。

(まずは、上々)

頼長のような頭でっかちは料理しやすい。真の敵はその背後にいる老人だ。円理と忠通父子の対決に、家成が手を差し込んで攪乱する。頼長は表舞台で踊らされる傀儡くぐつにすぎぬ。

家成は牛車の物見窓から月を見上げた。

(じきに十五夜じゃな)

元興寺の調べによれば、すでに指御子さすのみここと、安倍泰親が動き出していた。

鶴退治は、順当なら陰陽寮と検非違使けびいしちやう庁の任だ。あの手この手で足を引っ張り、失敗させねばならぬ。

(頼長の犬を手なずけるのは難しいが、損得勘定くらいできるじゃろう)

検非違使の源為義ためよしは頼長に忠誠を尽くしているが、退治に失敗すれば笑いものになり、武家の棟梁としての面目は丸潰れだ。頼長の顔にも泥を塗りかねないと説けば、為義は虎穴に入らず、身を引くのではないか。河内源氏かわちの力さえ封じれば、泰親は手足を失ったにも等しい。

(その先の落としどころも、思案しておかねばな)

著名な指御子が敗れたなら、鶴退治の値打ちは上がり、政局さえ大きく左右する。最も望ましい終わり方は、頼長も忠通も手に負えず、万人が恐怖する異形を、院近臣たる家成が退治した、という筋書きだ。

(陰陽師には広賢を用いるとして、平氏を使うのは考えものじゃな)

美福門院派の武家が失敗して力を失うのは痛手だ。他方、成功して力を持ちすぎても困る。

(勝敗いずれに転んでも、磨も院も傷つかぬ手頃な武士は……)

家成の脳裏に、虎髯の剽悍な男の顔が浮かんだ。

源頼政は無骨で気のいい武士ながら、驚くほど風雅な歌を詠む。朗らかな性格で、場を和ませるから、歌合せには重宝していた。

当代一の弓の名手ゆえに、本来なら競弓で公卿に取り入って官職にありつけるはずが、融通の利かぬ武人氣質が邪魔をした。競弓はただの遊びで、公卿の御曹司などにわざと負けて花を持たせる儀式なのに、頼政は勝負にこだわって必ず勝つため、誰も呼ばなくなった。

長らく無官で、摂津源氏はいつも火の車だから、割に合わない仕事でも喜んで請ける。蔵人頭に就く公卿の若い子弟の間では、蔵人所の雑用は頼政に任せるべしと評判だった。出世に関心がないから卑屈に取り入らないし、こき使われても、鈍いのか愚痴ひとつこぼさなかった。ちょうど先月、その頼政が「鶴退治をしたい」と、家成を訪ねてきた。

——磨がよきに計らってやるゆえ、ひとまず大人しゅうしておれ。

まだ退治されては困るから、下手に動くなと諭して帰したが、あの男なら、失敗しても惜しく



はない。院もお気に入りで、北面武士として鳥羽離宮にも警固や歌合せで出入りしているから、成功の暁には院の思召し召しだったと喧伝もできる。

(うむ。広賢と頼政にやらせるのがよさそうじゃな)

二人の様子を思い浮かべ、反りが合わぬかと案じたが、命ずれば否も応もあるまい。

(仮に、指御子が見事に退治してしもうた時は……)

ますますつけ上がる頼長をいっそう増長させて忠通と対立させ、院の不興を買わせればいい。

いずれに転んでも、家成に隙はなかった。

(鶴のおかげで、京も面白くなりそうじゃ)

牛車に揺られながら、家成はひとりほくそ笑んだ。

## 2

頼政がほろよい加減で永安門えいあんもんを出たとき、元日の太陽は傾き始めていた。

吐く息が白い。

無官の頼政は、宮中の朝賀ちやうがや新年の宴と無縁だ。大晦日は近くにいる身内を屋敷に集めて、さ

さやかながら楽しい宴を開いて新年を迎えたのだが、宴もたけなわ闌の頃、馴染みの蔵人頭から

校書殿きやうしよでんへ呼び出された。師走の望月夜にまた鶴が現れ、今度は人間を五人も喰らったせいで警

固の箇所が増えたため、さっそく蔵人所の仕事を頼みたいとの話だった。ともかく仕事をもらえ

るのはありがたい。ちょうど蔵人所で、ふだん世話になっている小吏たちが新年の宴を開いてお

り、強く誘われ、安酒を振る舞われて酔っ払ったのである。

(世は物騒じゃが、子らに歌、そして酒。わしはつくづく幸せ者じゃ)

夕空を見上げながら修明門しゅうめいもんをくぐるなり、影がさつと駆け寄ってきた。

「殿。本日も、泰親卿が森の検分をしましたぞ」

隼太はやたも野次馬に加わり、一部始終を見てきたらしい。

鶴が現れる直前、東三条ノ森に黒い霧が立つ。その森を丹念に調べるのは当然だが、わざわざ元日に出向いたのは、鶴退治を見世物とするためだ。

「指御子もお前も、正月から精が出るのう。じゃが、中納言様から釘を刺されとるじゃろ？」

「撰津源氏として動けずとも、一武人として天下に名を挙ぐるべし。家成卿は身勝手なお方にございます。鶴を退治してから報告なさいませ」

歌合せに欠けが出たからすぐに来いとか、今から遠出をするゆえ供をせよとか、家成はまるで家人のように頼政を顎あごで使った。信頼の証でもあろうが、確かに人使いはひどく荒い。

「手を拱こまねいておれば、誰たれぞに先を越されてしまいますぞ」

左大臣頼長は先月、鶴を退治した者に褒美を取らせると正式に触れを出した。さつそく腕に覚えのある野武士しやうもんじや唱聞師たちが全国から集まってきたが、野次馬が辺りを埋め尽くすあわわノ辻で、鶴の餌食となった。

隼太に言われて頼政も二条大路へ出向き、人だかりの後ろから様子を眺めていた。漆黒の闇の中で鶴がヒョーヒョーと鳴いた後、人間たちの悲鳴が上がり、やがて黒雲は消えた。生き残りもないから、ゆつくりと百を数えるほどの間に、真つ黒な辻で何が起こったのかさえ、定かではなかった。鶴が消えた後にはただ、身の毛もよだつ骸が辻に転がっていただけだ。噂どおり臓腑を

喰われた無惨な人間の姿をわが目で確かめた時、頼政の腹の底から異形に対する怒りがこみ上げてきた。武人として、仇を討つてやりたいと強く思った。

「今日も安倍本家の陰陽師と検非違使庁ほうめんの放免たちが、百人ほどで広い森を歩き回りましたが、鶴の巢は見つかりませなんだ」

隼太は頼政の耳元で声を落とした。

「実は、黒雲の中から生きて帰ったという関東の野武士が一人見つかりました。鶴の正体は猿だと申しておるとか。宿所を突き止めましたゆえ、これからご一緒いたしませぬか」

「すまん。これから娘に会いに行くんじや。正月じゃからのう」

頼政は子だくさんだが、貧窮のため、姻族の中流貴族に長女を預けて養育してもらっていた。月に三度は必ず会いに行く。頼政に似たのか歌上手で、大いに気に入られて嫡男の嫁に迎えたいと言われていた。

「やむを得ませぬな。仔細は追ってお知らせいたしまする」

隼太と別れた頼政は、早足で西へ向かう。

日が沈むまでに着けるだろう。

(わしはよき家臣、よき子らに恵まれた。皆、元気にしとるかかう)

男子は長ずると、本領の摂津か、伊豆、遠江など遠方の小領へ赴き、摂津源氏を支えてくれる。鶴退治で名を挙げられたら、ぼろ屋敷を修繕し、一族郎党を集めて大宴会を催したいものだ。

途中、頼政は広大な松林にさしかかった。宴えんノ松原まつばらだ。

鬱蒼とした森は異形でも出そうなほど気味が悪いため、肝試しを楽しむ公卿たちさえいた。二

百年ほど前、若き藤原道長が度胸を見せた話は有名だ。

(どうも、嫌な感じじゃな……)

邪気を感じた。愛刀の柄つかを握りながら、足早に松原を抜けてゆく。

頼政は幼い頃から靈感があった。両親の死も数日前に予感したし、想い女を訪ねるはずが、急に具合が悪くなって寝込んでしまったところ、当夜の火事その女が亡くなったこともある。

右手のほうでバサバサと羽音がした。鳥からすたちが一斉に飛び立ってゆく。

武徳殿の方角か。目をやると、樹々の間に青い桂つちぎが見えた。女がいるらしい。

逢魔時おうまがときも近いのに、かように物騒な場所で何用か。

(異形に襲われたら気の毒じゃ。捨て置けまい)

頼政は道から逸れて、松原の奥の青色を目指した。

宴ノ松原ではその昔、恐ろしい鬼に女が喰われた。美女に化けた狐たぬらに男が誑たぶらかされた話もある。

薄暗がりの松林を進むうち、ひとりの女の後ろ姿が見えた。大きな石に腰掛けている。

腰まで届く長い髪は、吸い込まれそうな漆黒だ。

「こんな所で何をしとる？ 鬼に襲われるぞ」

びくりと肩を震わせた女が肩越しに振り返った時、頼政の全身が絵毛立った。

裂けた口の周りが血で真っ赤だ。

頼政は後ずさった。とつさに腰の愛刀みやまぎ(深山木)を抜き放つ。ほろ酔いも一瞬で醒めた。

「やはり京には、異形が多い」

鬼女が立ち上がり、頼政に向き直った。

今は小柄で華奢でも、いつ大男に変化するやも知れぬ。へんげ

頼政は下がって間合いを取りつつ、刀を下段に構えた。

鬼退治をすれば、摂津源氏も名を挙げられよう。

「女の鬼がおったとは。人間を喰らっておったか？」

鬼女は白い手を懐の中へ入れた。

「まあ、なんと失礼な殿方ですこと」

女が小さな手拭いで口の周りを拭きとると、裂けていた口がおちよぼ口になった。

「食べていたのは犬枇杷いぬびわの実でございます。ご覧なさいまし」

差し出された白い掌の上には、暗い紅紫をした実が幾つも載っていた。

「よろしければ、お試しを。慣れないと美味ではありませんから、ひと粒だけ」

暗がりで見える若い女は、人間とも思えぬ美しさだ。

やはり異形ではないのか。

「鬼女が毒入りの実を喰わせたとしても、不思議はない」

「では、差し上げません。わたくしひとりで食べてしまいます」

女は白い指でつまみ上げた実を口へ入れ、美味しそうに食べた。

「そこもとは何者か」

「どこの誰とも知れぬ殿方に、なぜ明かさねばなりませんか？」

ふくれっ面が可愛らしいと思った。はたち二十歳前後か。

「わしは源頼政。歌と武芸は達人なれど、万年、従五位下のままで官職にありつけぬ。とうぶん出世の見込みはないと、多くの者から言われている」

「お気の毒に。わたくしは皇后多子さまにお仕えする女官で、螢火ほたるびと申します」

多子は左大臣頼長の養女である。待賢門院派で、家成の政敵だ。

「帝の御后みかどにお仕えする者が、かような時刻に独りで禁裏を出て宴ノ松原におるなぞ、にわかには信じられぬ」

門から出る許しも、容易には得られぬはずだ。

「でも、ほら。こうして現にいますではありませんか」

頼政は両手を広げる女の白い顔を凝視した。

場所が夕暮れの宴ノ松原でさえなければ、恋歌を一首捧げたい美女だ。

「されば、改めて尋ねる。ここで何をしておった？」

「ご覧のとおり、おなか为空いたので、犬枇杷いぬびわを食しております」

「ますます腑に落ちぬぞ。なぜ宮中で食わぬ？」

「他の女官たちにおすそ分けしたり、どこで手に入れたとか、お話しせねばなりませんから。こんな所で食べていたのは変でしょうけれど、わたくしにもちゃんとした事情があるのです」

「どんな事情じゃな？」

女は白いあごに指先を当てていたが、やがて小さくうなずいた。

「お疑いですから申しますけれど、皇后さまのお使いです。それ以上はお話しできません」

もしも鬼女なら、次に宴ノ松原を通った者が喰われよう。

「わしは時折、禁裏の警固を預かっておる。不審な女を捨て置くわけにはいかん」

頼政はまだ深山木を下段に構えたままだ。

「では、宜秋門までお送りくださいまし」

禁裏の西にある門はたまに使うが、さらに内郭の陰明門おんめいもんをくぐれば、後涼殿こうりょうでんを挟んで、帝の住まわれる清涼殿の裏手だ。

どう見ても麗しく若い女だが、尋常でない美しさが気に懸かった。

「何をじろじろ見ておられるのですか？」

「顔は確かに人間じゃ。されど、もしもそこもとが鬼女なら、異形を禁裏の中へ入れてしまうことになる」

「うるさい殿方ですね。それなら——」

螢火が帯を解き始めると、あつという間に素裸になった。

青白いほどの裸身は輝くようだ。

豊かな胸には小さな護符が架かっており、漢字が四文字記されていた。頼政にも読めない奇妙な文字だ。

頼政はあわてて目を背け、くるりと後ろを向いた。

「わかった。ひとまず信じるゆえ、早う着てくれい」

風変わりで肝の据わった女だ。確かにこの女なら、独りで宴ノ松原に来てもおかしくはない。

「寒いさむい」

背後で衣擦れの音がすると、頼政は無言で深山木を鞘へ収めた。

やがて、気を取り直したように明るい声がした。

「さあ参りましょう、頼政さま」

並んで歩き出すや、螢火はキャツと悲鳴を上げて転んだ。

「大事ないか、螢火？」

「足を挫くじきました。あなたさまのせいです」

草の汁が滲んだのか、膝小僧の辺りが青黒くなっている。

「わしが悪いんか？」

「もちろんです。まだ日のあるうちに戻るはずだったのに、鬼女などとあらぬ疑いをかけてわたくしを足止めたのですから」

「すまん。ならば、これでどうじゃな？」

頼政は口を尖らせる螢火を横抱きして、歩き出した。

柔らかい女の体を、自分の両腕と胸に感じた。真冬に素裸になったせいとか、体が冷たいのを気の毒に思った。

「悪くない心地でございます」

宜秋門を守る兵衛ひょうゑが認めるなら、人間と信じてよかろうが……。

「狐が化けておるのか、そこもとの美しさは人間離れしておる」  
なおじつと見つめながら言うと、螢火が顔を赤くした。

「まあ……まっすぐな口説き方ですこと」

「いかん！」



木の根っこにつまずき、頼政は派手につんのめった。

螢火を守りながら、顔から地面に突っ伏す。

「だいじょうぶですか、頼政さま？」

激痛に両手で鼻を押さえていると、螢火が顔を覗き込んできた。

「鼻を打つと、何ゆえかように痛いんじゃないかな」

「そんなに幾度もお鼻を打っておられるのですか？」

「これでも武人じゃからの。幼き頃から、稽古で体中を怪我しておった。最近にしごちは西市のはずれで、馬から落ちて鼻を打った」

「乗馬が苦手なのですな」

「違うわい。大得意なんじゃが、わしの愛馬が、飛び出してきた犬を蹴飛ばしそうになってな。

慌てて手綱を引いたんじゃない」

螢火が目を見開き、頼政を見つめている。

「……変わったお鼻の打ち方ですこと。それにしても、迷惑な犬ですね」

「まだ子犬じゃからの。今ではわしの屋敷で皆に可愛がられとるわい。腹が減って急いどったわしが悪いんじゃない。さてと、ようやく落ち着いた。参ろうぞ」

頼政は再び螢火を抱き上げる。

「そういえば、最初の妻と怖いもの見たさで深泥池みどろがいけへ行った折も、こうやって池の中を歩いたもんじゃない。あの時は、大変な目に遭った」

「もしや、さつきみたいに転ばれたのですか？」

「何でわかる？ 二人ともびしょ濡れになってな。じゃが本当は、わしの足首を誰かの手が掴んだと思えんのじゃ」

「まあ、怖い。では、さつきも？」

「さつきは暗がりじゃし、そこもとを抱いておって、足元が見えなんだだけよ」

「なんだ、つまりませんね」

「わしは苦手なんじゃが、どうも女子は怪異が好きなようじゃな。二人目の妻が乳飲み子連れたかのて高野の崇道神社で……」

問われてもいないのに、頼政は亡き妻や遠くにいる子らの話をした。

螢火は問いを挟みながら、熱心に聞いている。

宴ノ松原を抜けると、禁裏の白壁が見えてきた。

「螢火。いつかまた会えぬものかな」

頼政は腕の中の女に問いかけてみた。

「どうしてですか？」

「そこもとが真に人間なのか、確かめねばならん」

もしも禁裏の人間が喰われる事件など起これば、螢火の仕業やも知れぬ。頼政の責めともなるう。いや、また会いたいからか。

「わかりました。では、次の朔日さくじつ（新月の日）に雨が降らなければ、夕暮れに宴ノ松原で」

「なにゆえ、さような場所なんじゃ？ 寒いではないか」

「宮中で殿方とお会いするのは難しゆうございますし、いろいろと事情があるのです」

前方に宜秋門の四脚が見えてくると、頼政の腕から、螢火が白い野うさぎのように地へ降り立った。

螢火は一礼して、軽やかな足取りで禁裏へ向かう。

(足を挫いとしたはずじゃが、芝居をしとったのか……)

平安京の空が夜の支度を始めている。

門へ着いた螢火を、兵衛が丁重に迎え入れた。

舞でも踊るように、青い桂は禁裏の奥へ消えて行った。

3

年初の行事も一段落して、大内裏には静けさが戻りつつあった。

図書寮の一室からは、宴ノ松原の鬱蒼とした濃緑がよく見える。

明るい冬日に照らされても、森の奥は薄暗く、夜は鬼が出るとの噂が絶えなかった。広賢も真偽を確かめるべく深更に何度か歩いてみたが、松の根につまずいて転びそうになっただけだ。

(泰親が、何の用か……)

今をときめく安倍本家の陰陽師が、大内裏でも北のはずれの図書寮を訪ねてくるという。宮中の行事でまれに同席しても挨拶さえしない仲だから、かれこれ二十年ほどろくに話をしていなかった。泰親の政敵は目の上のたんこぶである陰陽頭、賀茂憲栄であり、日陰者の広賢など齒牙にもかけていないはずだった。

森を迂回する一台の牛車が見えた。

屋形には八葉の紋（九曜星）が描かれている。

（飛ぶ鳥を落とす勢いの陰陽師でも、網代車か）  
あじろくくるま

泰親は憲栄に次ぐ陰陽助で権陰陽博士ながら、諸祭や占卜の技倆は当代最高と賞せられていた。だが、からくりは単純だ。例えば後の懷妊なら、予め渡りをつけてある宮中の女房から聞の様子を聞き出した後、頃合いを見て予言し、出入りの薬師に懷妊を伝えさせる。

人は慶事より他人の不幸や災難に関心を持つから、陰陽師たちは悪しき予言にこそ力を入れる。事情をよく聞き、ありそうな禍事を予言したうえで、避けるための被いをする。不幸が起こらねば自分のおかげだと恩を売り、仮に起これば予言通り避けられなかったと残念がるわけだ。

泰親は二年前にも土御門禁裏の炎上を当てて見せた。放火の企てを掴んだ後、あえて阻止せずに予言したのかも知れない。昨年も占卜の相違を巡って憲栄と論争し、勝利していた。賀茂家を凌駕する安倍本家の声望と隆盛は、ひとえに泰親の力による。

牛がのどかに鳴き、図書寮の前で牛車が止まった。

（望月まで、あと五日。もしや用件は鶴がらみか）

広賢も先月の十五夜は、あわわノ辻の南東角近くに建つ木工寮の一室にいた。  
むくりょう

惨劇の様子を見るには好適な場所として家成が手配した二階の部屋は、丑ノ刻（午前二時頃）には黒雲に覆われて何も見えなかったが、由良に邪気ゆらを確かめさせた。漆黒の闇が去り、月影の下に無惨な骸が転がっていたのは前回と変わりない。穢れては困るから、貴族たちも表立って見物ものはしないが、泰親もどこから密かに見ていたはずだ。

やがて現れた洒落男は、黒光りする狩衣かりぎぬに身を包んでいた。

「しばらく来ぬうちに、宴ノ松原にもかなり邪気がたまっておるな」

安倍泰親は舌打ちをしてから、真紅の鉄扇てっせんを手に、雅な仕草で着座した。

「鬼が出るとでも言いたいのか？」

「鬼は役に立つ。下々の陰陽師が食いつぶぐれぬためにもな」

元来「鬼」は死者の霊を指し、「隠おに」と書いた。鬼門に当たる北東の冥界にいとされ、目に見えぬがゆえに、人々は恐れた。

「泰山府君祭で、荒稼たいざんふくんさいぎしているそうだな」

その昔、三井寺みいでらの高僧が死の床に就いた時、安倍清明せいめいは誰かが身代わりとなれば、祈祷により寿命を交換できると告げた。皆が尻込みする中、愚鈍で馬鹿にされている若い弟子が名乗り出た。清明が術を施すと、はたして高僧は生きながらえた。さらに弟子の信心が奇跡を起こし、師弟共に助かったとされる。泰親はこの伝承ちなに因んだ祭事を大いに流行させ、祭料として朝廷から荘園まで賜った。清明をまるで半神のごとくに喧伝し、安倍本家の地位と名誉を高からしめたのである。

「死者の復活は無理だが、人間の延命は難しくない」

泰親は薄笑みさえ浮かべながら、さらりと応じた。

寿命など誰も知らぬし、生死を司る泰山府君が祈りを聞き届けられない場合もあるから、どちらに転んでも泰親は傷付かない。指御子の真骨頂は、周到に調べた上で、巧みな話術を用いて依頼主を心底信じ込ませる、派手な演出と凝った筋書きだった。

「それで、身どもに何か用か」

「忙しいゆえ腹の探り合いはやめて、単刀直入に言おう。広賢、私と手を組まぬか？」

陰陽寮での官職は泰親のほうが上だ。自分に従えという意味に近い。

「どういう風の吹き回しだ？」

「賀茂家から、曆道を奪いたい」

清明以後、曆道は賀茂家、天文道は安倍家の領分とされてきた。いよいよ宣戦布告する気か。

「身どもの力添えなど無用であろうが」

「学識でそなたに並ぶ者はおらぬ。『占事略決』せんじりやくけつに記された三十六種の六壬式占術を完全<sub>りくじん</sub>に会得

した陰陽師は、私とそなただけであろう。四課三伝による推条も完璧だ。私が陰陽頭の座を奪えば、陰陽助が空く」

「関心がないな」

そつけなく応じると、泰親は苦笑した。

「憲栄は取るに足らぬ陰陽師だが、後ろにあの関白がついておるゆえ、厄介でな」

陰陽師はしばしば政争に巻き込まれる。いや、泰親こそ政争を利用してのし上がってきた人間だ。長らく陰陽頭を務める憲栄は、家柄だけで高位に就いた老人で、陰陽師としては二流ながら政争は一流だった。

「左府様より下命があった。こたびの鶴退治を機に、陰陽寮から賀茂家を放逐する。力を貸してくれぬか」

「断る。賀茂家に与<sub>くみ</sub>する気もないが、さりとて身どもが本家のために骨を折る理由もない」

「……まだ、晴仁殿せいじんを探しておるのか？」

硬い顔つきで問う泰親に、広賢は返事をしなかった。

二十七年前の天治元年（一一二四）の夏、あの惨劇は起こった。

当時、安倍三流派は、当主の交代により対立から融和へと舵を切り、本家の政文、傍流の兼時、まさぐみ 広賢の兄晴仁が手を結んで賀茂憲栄に対抗する構図を作りつつあった。

明け方、広賢と泰親はそれぞれ急な報せを受けて、陰陽寮へ駆けつけた。

当主三人が盃を交わしていたという寮の半地下の一室には、一頭の痩せた青い狼が息絶えており、噛み殺されたらしい四人の見知らぬ武士の隣で、政文が臍腑を喰われて事切れていた。唯一生き残った兼時によれば、三人の歓談中に、武士たちが前触れもなく闖入してきた。晴仁が対抗して咒じゆを唱えると、にわかには黒い霧が部屋に満ちた。喧騒と悲鳴が続き、霧が晴れた後、目を覆いたくなる惨状が広がっていた、という。晴仁の遺骸はなかったが、以来その姿を見た者はいない。

賀茂家に雇われた殺し屋の仕業だと兼時は齒軋りしたが、若き広賢には何かを隠しているように思えてならなかった。その後、年長の兼時は「布留部」と名乗って泰親の後見となり、祇園臨時祭を始めるなど、後に失脚するまで幅を利かせた。

「私の兄は下らぬ俗物だったが、もうずいぶん昔の話ではないか」

泰親の兄、政文は愛想のいい男だったが、後に調べてみると、裏では素性の知れぬ野武士や怪しげな唱聞師と付き合っていた。晴仁失踪の半年ほど前には晴仁の妻も神隠しに遭っており、都では、臍腑を失くした浮浪の骸が見つかったと騒ぎになってもいた。

「身どもにとっては、謎が解き明かされるまで、あの事件はまだ続いている」

兄はまだ生きていると、広賢は信じた。いや、信じようとした。

「晴仁殿は百年に一度の天才であった。本来なら、晴明さえ超える陰陽師として歴史に名を残したろう。私も可愛がってもらったゆえ、よく知っている」

広賢の父宗明は一流派を確立し、宗明流の始祖とされているが、実際には長男の晴仁が十五歳にして創り上げた陰陽道だ。

「私がそなたを避けてきたのは、禁断の道を選んだからだ。広賢よ、サムハラの蟻地獄で一生を終える気か？ そろそろ闇から出て、太陽の下を共に歩まぬか」

陰陽師はかつて呪禁師じゆんしと呼ばれ、死穢まかるさわりを扱ってきた。本来は正面から死と対峙して、冥界の謎を解き明かすべき役回りのはずだった。だが、次第に陰陽師たちは、手に負えぬ死者と冥界から背を向け始めた。生者を相手として、呪いや祟りによる病の治療と、破邪や呪詛の祓いに特化するようになったのである。

「放っておいてくれ。身どもは自分の道を往く」

泰親が活躍する表の陰陽道を光とするなら、その裏には闇の体系がある。まれに歴史に登場する晴明や晴仁のような大天才は、たやすく表の陰陽道を極めてしまい、その後は闇の魔力に取り憑かれ、のめり込む。中には変死を遂げる者までいた。

古代の方術に淵源を持つ裏の陰陽道は、冥界から死者を復活させる究極の秘法の名を取り、「サムハラ」と呼ばれた。かつて陰陽道を極めた吉備真備きびのまきびは、鬼の嫉むところ深入りするべからずと子孫を戒めたと伝わるが、真備の念頭にあったのは冥界に介入するサムハラだった。

泰親が身を乗り出し、ぐっと声を落とした。



「布留部が京に戻ったらしい。兼時改め、晴道せいどうとも名乗っているそうだ」

兼時は通り一遍の術しか使えない凡庸な陰陽師だった。泰親から本家の財産を奪い取ろうとして失敗し、最後には撰関家を呪詛した疑いを懸けられて、都を逐おわれた。長じた泰親にはめられたわけだ。

「名を変えたところで、二流の陰陽師には何もできまい」

「昔、奴の住んでいた庵ぼうわくへ行ったことがある」

大仏仁王門通りの茅屋には、バラバラにされた獣の遺骸や白骨が転がっていたという。

「わが手の者に調べさせたところ、奴は関白に取り入っている。妙だとは思わぬか」  
なぜ忠通ほどの公卿が落ちぶれ陰陽師を用いるのか。確かに面妖だ。

「奴は私に恨みがある。復讐のために鶴を生み出し、都を恐怖に陥れたあげく、退治して英雄となる肚はらかも知れぬ。関白の懐刀なら、陰陽頭として返り咲けよう」

「布留部がサムハラを使えるとしても申すのか」

「わからぬゆえ、ここに来た。サムハラはそなたの領分だ。実は私も昔の事件が引つかかるのだ」  
兄を惨殺された泰親にとっても、心の傷になっているのだろう。

「真実を知るためなら、手を貸すのもやぶさかではない」

「奴の居場所がわかれば、教える」

話は終わったとばかり、泰親は立ち上がった。

「鶴退治のほうはどうだ？」

「左府様のお指図で、檢非違使庁と組んで、派手な見世物に仕立てる。三月みつき続けて出現したゆえ、

次の十五夜は現れぬやも知れんがな」

泰親は自信たつぷりに応じた後、目を合わせずに付け加えた。

「晴仁殿が贈ってくれた笙しょうを今も使っている。政争を離れて、家成卿と合わせる時もある。そなたも一度、雅楽の集いに来てみぬか？」

昔、雅楽好きの晴仁は、広賢に筆策ひつちやくをくれた。三人で曲を合わせたこともある。

「遠慮しておこう。長い間、吹いたこともない」

「惜しいな。そなたとは道を違えて疎遠になったが、昔のように付き合えぬものかと、中原なかはらとも話していた」

広賢は返事をしなかった。

中原は泰親の腹心の陰陽師だが、もともとは晴仁を崇拝してやまぬ真面目ひと筋の弟子だった。ある時、公卿から「病に苦しむわが子を救ってほしい」と頼まれた中原は、七日七晩一睡もせず、ほとんど飲まず食わずで祈祷を続けたものの、結局救えなかった。その後、自分も半月ほど寝込んだが、おかげでわが子は安らかに逝ったと感謝された話は有名だ。中原はこれまでも、泰親と広賢の間を取り持とうと試みてきたが、涙ぐましい努力は報われていなかった。

泰親の牛車が宴ノ松原を迂回しながら、ゆっくりと去ってゆく。

(お互い齢を食って、多少は角かどが取れたのやも知れぬな)

家成からは泰親の妨害を命じられているが、手出しはすまいと思った。

(今ごろ螢火は、何をしとるかのう……)

頼政は廂ノ間に寝転がり、庭の白梅の蕾をぼんやりと眺めている。つぼみ

おととい、二月朔日の夕べにも会った。

盛春のように暖かい日の名残りを感じながら、宴ノ松原の大岩に並んで座り、身を寄せ合い、時を忘れて楽しく話した。犬枇杷の実と一緒に食べたものの、美味どころかひどい味で、なぜかその夜は具合が悪くなって寝込んだ。今もまだ気分が優れないが、犬枇杷はひと粒しか食べなかつたから、関わりあるまい。むしろ心身が優れぬ理由はわかつていた。

(恋煩いで、かように体を壊すとはの)

螢火とは馬が合った。

京から出た経験がないと言うので、頼政が亡き父と東国にいた頃に盗賊をやつつけた武勇伝はもちろん、富士山、住吉の浜、吉野の桜、鳴尾の一ツ松など、風光明媚な地を訪ねた思い出話を語り、歌を披露したら、大いに喜んでくれた。いつか宇治にある撰閑家の平等院を訪れたいと漏らすと、螢火は「わたくしもです」と応じたが、二人で夢物語だと苦笑したものだ。

螢火はあまり物を知らず、歌も苦手で、皇后付きの女官とはいえ、身分の高い家の出ではなさそうだった。対立する派閥の話でもあり、頼政からは何も尋ねてはいない。

(あの笑顔が、よいのじゃ)

螢火はよく笑った。ちよつとした話でも、すぐに肩を震わせる。

後添えに迎えたいと言ったら、子らや家中の者たちは反対するだろうか。頼長方の女官だから、家成も良い顔をすまいし、道のりは険しそうだが、まずは恋を育みたかった。

(次は、わしが菓子でも持って参ろう)

螢火を想うと、美しい裸身が眼に浮かんでしまう。

多子の使いとしての仕事は気になるが、鬼女であるはずがない。

ふうーと、頼政は深いため息をついた。

「殿、やはり昨夜も出ませんでしたぞ」

頼政の物思いを遮って、隼太が間近に座り込んだ。

一月の十五夜も、頼政主従のほか、多くの野武士や陰陽師もどきがあわわノ辻で張り込んだ。しかし、厚雲の垂れ込める不気味な空から、鶴はついに姿を見せなかった。

「次の満月まで待つしかなかるうて」

頼政は寝そべったままあくびをした。昨夜も眠れなかった。鶴よりも、螢火のことばかり考えている。

「毎夜、張り込む者もおりますゆえ、某は今夜も参りまする」

万一現れたら退治して、摂津源氏の家来が大手柄を立てたと喧伝するそうだ。

「無理をして、風邪なんぞ引かぬようにな」

「わかっております。ときに、近ごろ気鬱の殿に、よき報せをお持ちしました」

隼太が白い歯を見せて、にんまりと笑っている。

「喜ばれませ。あやめござん 菖蒲御前から、お返事を賜りましたぞ」

鳥羽院に仕える菖蒲御前は、院御所いんごしよで最も美しい女官としてつとに有名で、多くの男たちが言い寄っていたが、すげなかった。頼政も垣間見た美貌が忘れられず、三年にわたり恋歌を送り続けたものの、相手にされなかった。そこで昨夏、これを最後にと、一首の歌を贈った。

へ 聞きもせず 我も聞かれじ 今はただ ひとりびとりが 世になくもがな

長らく返事もなく、やりとりもないから、もう自分か菖蒲御前か、どちらかが現世からいなくなればいいのに、という自棄やけ気味の歌だった。

「ほう。今ごろ、どんな返歌じゃろな」

頼政はむっくりと半身を起こす。

「それが、御歌ではないようぞ」

隼太が差し出してきたのは、竹皮の包みである。

掌へ中身を空けると、棘のある黒灰色の実がひとつ、転がり落ちてきた。

「菱子ひしのみでござるな。……答えは、否と？」

「いや、謎かけじゃ。柿本人麻呂かきものひとまろに、よき歌がある」

へ 君がため 浮沼うきぬの池の 菱摘つむと、我が染めし袖 濡れにけるかも

頼政が朗々と諳そらんじてても、隼太は首をかしげている。

「恋する女性へ贈るために、池の菱を摘んで袖を濡らしたという恋歌じゃ。恋しさゆえの涙でもあるがな」

「菱の実は秋にできるもの。季節外れではありませぬか」

「さよう。菖蒲御前が頼珍とんちんかん漢な真似をするはずがない。わざと時をずらしたのじゃ」

頼政がしばらく恋文を出さなかったから、以前はあれだけ恋を歌ったくせに、自分のためにはもう菱を摘まないのか、という非難めいた催促だ。

「では……殿の恋がついに実ると？」

隼太が勝手に興奮している。

「脈はありそうじゃが、恋は駆け引きを楽しむものよ」

「某の鳥羽通いも終わると思いましたが、面倒な話でござる。して、いかがなさいまする？」

頼政は腕を組んで思案したが、頭がぼーっとしていた。

「今はどうも、よき歌が浮かばぬな」

「殿はこの三年、三日に上げず菖蒲、菖蒲と仰っていたのに、今年に入ってとんと聞きませぬ。

他の女子に懸想けそうされましたな？」

螢火のことは、まだ誰にも話していない。

「豪放磊落ごうほうらいらくで著名な源頼政にかくも元気がないのは、恋煩い以外に考えられませぬ。次はどちらの女子にござるか？」

頼政は辺りを見回してから、「皆にはまだ内緒じゃぞ」と声を落とした。

「皇后多子さまにお仕えする女官でな。螢火という」

「何と。悪左府方とは、またややこしい恋を。いったいどこで、さようなお方と？」  
黙っていると、浅黒い顔が心配そうに覗き込んできた。

「……それは言えんが、怪しい女性ではない」

「よほど歌のお上手なお方にございましょうな？」

「そういえば、歌はまだ交わしとらん」

首を傾げる頼政を見ながら、隼太は呆れた様子だ。

「こたびの恋は、ずいぶん変わっておられますな」

その通りだ。これまで頼政の恋の半分は、相手の歌才に惚れていたのかも知れない。

へ 思へども いはで忍ぶの すり衣 心の中に みだれぬるかな

即興で朗々と吟ずるや、隼太は「さればこれにて」と逃げるように去って行った。

われながら、悪くない出来だ。

よい歌が詠めるといふことは、調子が戻ってきた証拠だ。

ふと庭の地蔵仏へ目が行った。慈悲に満ちた穏やかな笑みで、頼政の新しい恋を励ましてくれる気がした。

家成が長い透渡殿すいわたじのを行くうち、春を予感させる風に梅花が香った。

(関白は怒つとるじやろなあ)

忠通の関白就任に激怒した頼長は、父の円理に泣きつき、院に圧力をかけてきた。結果、先月十六日に内覧宣下を受け、さらに二十四日に隨身兵仗を賜った。忠通が烏丸小路の屋敷に呼びつけたのは、押されつ放しの家成を叱責するために違いなかった。

(じゃがこれで、摂関家の諍いは放つておいても燃え盛る)

兄弟は完全に決裂し、もう関係の修復は不可能だ。これでいい。

公卿たちは方違えのために多くの別荘を持つが、摂関家の別邸ながら贅を尽くした忠通の庭には、池の向こうに紅白の梅が咲き乱れていた。

廂ノ間で池畔の水仙を愛でる公卿の姿が見えた。

「東三条殿を追い出されて、小さい庭になってしもうたわ」

忠通はやわらかい物腰で家成を迎え入れたが、のつけから自嘲めいた非難をぶつけてきた。ふくよかな頬に小さな眼は一見優しげでも、政争の修羅場を幾つも潜り抜けてきた男だ。

幾人も家人が手慣れた動きで、酒席を用意してゆく。

勧められて、家成は内心構えながら盃を口へ運んだ。軽く濁酒を舐める。

「院とは若き日より、艱難辛苦を共にさせていただいた。愚弟が院の御心を煩わし、まことに面目ないと思うておる」

「こちらこそ、円理様に押し切られ——」

「院はご承知じやろうが、太政大臣も内大臣も腹に一物持つておる。保身しか頭はない日和見公卿を、頼長ごときに馭せはせぬ。悪左府も父上も、磨と事を構えて、勝てるつもりかのう」



忠通は檜扇をわずかに開き、パチリと音を鳴らして閉じた。蝶の飾り金具がきらりと光る。

「されど、待賢門院派の力は侮れますまい」

家成は上目遣いに忠通を見たが、返事はなかった。

のっぺりした表情は寸分も変わらない。

忠通の立ち位置は今、美福門院派であり、家成の味方のはずだが、将来いつ杖たもとを分かつやも知れぬ。互いに腹を割った話はしないが、敵に回したくない男だ。

「悪左府は、いつまで鶴をのさばらせておくつもりかの」

令外官りょうげのかんでは閑白たる忠通が最高位でも、政を動かすのはあくまで左大臣頼長だ。

「指御子が鶴退治の支度を着々と進めておる様子」

忠通が家成をジロリと見た。

白い顔には、作りものの笑みが張り付いている。

「先だつての黒雲は次第に大きゆうなつて、禁裏はもちろん宴ノ松原の上まで覆ったとか。帝の御身が心配じゃ」

「検非違使の源為義も動いております。次の十五夜には、いよいよ鶴退治に挑むかと」

「頼長の犬か。見ものじゃのう」

忠通は軽く嗤った後、さらりと言つてのけた。

「頼長は必ず失敗する。されば、院に申し上げよ。曆にご下命あらば、いつにても鶴を退治してご覧に入れるとな」

忠通が見せる異様なほどの自信は、どこから来るのだ？

もしか、鶴の謎を知っているのか。

門を出ると、牛車の傍らで元興寺が待っていた。

倒れるように屋形へ乗り込んだ家成は、ひどい気疲れを感じた。

寒気を覚え、自分が全身にぐっしりと冷や汗を掻いているのに気づいた。

政争にあつて、忠通は鶴をいかに使うつもりなのか。

当面は味方と考えてよいのか、家成にはそれさえわからなかった。

(つづく)